あまねく

amaneku 2022 vol.12

同志社大学 スチューデントダイバーシティ・アクセシビリティ支援室

はじめに

「あまねく」第12号発刊によせて

スチューデントダイバーシティ・アクセシビリティ支援室長
松川　真美

「あまねく」は、「遍く」や「普く」と表記されます。用いる漢字が異なっても、大きな違いはないようですが、これらを組み合わせると「普遍」、すなわち、「すべてに広くいきわたること。すべてのものにあてはまること。」という意味になります。つまり「あまねく」には、これは誠に短い形容詞ですが、「自主自立を目指すすべての学生に、もれなく学びの機会をわたらせる」という、本学の願いが象徴的に示されているともいえます。

2021年に改正された障害者差別解消法では、民間事業者も合理的配慮をしなければならないことになりました。障がい学生の学ぶ権利を保障し、その特性に合わせて合理的配慮を行うことは、「もれなく学びの機会をわたらせる」ための「すべての大学が果たすべき責任」となったわけです。その中では、すべての教職員は合理的配慮を実施するとともに、学生が学ぶ権利に関する理解を深め、あらゆる教育・研究活動の場で常にそれを意識していかなくてはなりません。奇しくも、この法改正と同年に同志社大学ではスチューデントダイバーシティ・アクセシビリティ支援室が発足しました。SDA室では、この大きな転換点を、学内の様々なヒトとヒトの関わりを生むイノベーションの好機と捉え、法改正のその先を見据えた新たな支援のあり方を創造していきたいと考えています。

さて、この2年以上に及ぶ新型コロナウイルス危機は、21世紀の社会の画期となりました。このわずかな期間に、同志社大学の障がい学生支援のあり方も大きく変わっています。急速に普及したWEBシステムはいつの間にか日常となり、いまでは学生スタッフが校地や移動時間に縛られることなく、オンラインで多様なサポート活動を展開しています。そしてようやく、2022年度から対面授業が全面的に始まりました。障がい学生支援の場でも、オンラインに加えて対面活動が再開し、両手法の利点を生かした複合的なサポートが展開しつつあります。この世界的な災いを、転じて大きな福となすためにも、この危機がもたらした負の側面を克服し、より俯瞰的な視点をもって、新たな支援を考え、進めていきたいと思います。

いま、障がいのみならず、国籍、性別、性的指向・性自認、文化、宗教、思想信条といった「多様性（diversity）」を尊重する機運が世界的に高まっています。この同志社大学においても、同じ志を持って集まった多様な人々が、すべからく、あまねく「個」を発揮できるキャンパスを実現することも、スチューデントダイバーシティ・アクセシビリティ支援室の大きな使命の一つです。2021年度には、同志社大学の「障がい学生支援制度発足20周年記念シンポジウム」をオンラインで開催し、学内外から多数の障がい学生支援関係者の方にご出席いただきました。このシンポジウムでは、これまで本学の障がい学生支援が歩んできた道程を再確認するとともに、これから支援室が向かうべき新たな方向性が見出されたように思います。

この広報誌「あまねく」が、本学における障がい学生支援の理念と取り組みや、障がい学生支援を地道に支える学生スタッフならびに利用学生の様子を多くの人に知っていただくための、そして、全国の障がいのある学生・生徒の皆さんやその関係者の方々、ひいては、多様な人々の共生と発展を目指す社会の実現を願うすべての方々を繋げるための、新たな標となれば幸いです。

目　　次

はじめに「あまねく」第 12 号発刊によせて …… 01

＜大学内行事開催状況＞ …… 03

03　2021 年度入学式手話通訳 /2021 年度入学式パソコン通訳 /2021 年度オリエンテーション / 春学期始め顔合わせ会 / 障がい学生支援 制度説明会 / 春学期フォローアップ勉強会

04　春学期ランチタイム手話 / 秋学期ランチタイム手話

05・06　同志社大学障がい学生支援制度発足 20 周年記念展示 / 同志社大学障がい学生支援制度発足 20 周年記念シンポジウム

07　春学期フォローアップ勉強会 学生企画 / 春学期末全体懇談会

08　秋学期フォローアップ勉強会 障がいについて語ろう

09　秋学期末全体懇談会･懇親会 / チャペル･アワー / 校祖墓参 / 障がい学生対象「就職ガイダンス＆相談会」

10　第 17 回 Challenged キャンプ

11　複合領域科目「ダイバーシティ社会における「支え合い」を考える」

＜社会貢献事業＞…… 11

11　パラスポーツ振興事業　パラスポーツトークイベント
～誰もがいつでもどこでもスポーツを楽しめる未来をめざして～

＜スチューデントダイバーシティ・アクセシビリティ支援室について＞…… 12

＜同志社大学における障がい学生支援の沿革＞…… 13

（表紙写真：同志社大学提供）

大学内行事開催状況

新型コロナウイルス感染症の影響により、2020 年以降の多くの授業や行事がオンライン化されましたが、徐々に対面開催も増えてきました。以下では 2021 年度の学内行事を報告します。

●2021年度 入学式手話通訳

開催日・場所：4 月 1 日（木）
京田辺校地　デイヴィス記念館
協力スタッフ：2 名

●2021年度 入学式パソコン通訳

開催日・場所：4 月 1 日（木）
京田辺校地　デイヴィス記念館
協力スタッフ：4 名

●2021年度 オリエンテーション

開催期間・場所：4 月 3 日（土）～ 6 日（火）
オンライン
協 力 ス タ ッ フ：7 名

●春学期始め顔合わせ会

開催日・場所：4 月 5 日（月）　オンライン
参　加　者　数：39 名

●障がい学生支援　制度説明会

開催期間・場所：4 月 13 日（火）～ 16 日（金）
オンライン
参　加　者　数：10 名
協 力 ス タ ッ フ：6 名

●春学期フォローアップ勉強会

開催期間・場所：4 月 21 日（水）～
7 月 13 日（火）
オンライン
参　加　者　数：延べ 63 名
講　師　協　力：延べ 11 名

●春学期ランチタイム手話

開催期間・場所：４月～７月　第２・第４水曜日　オンライン
参　加　者　数：約 10 名／回
講　師　協　力：２名（利用学生・学生スタッフ）

●秋学期ランチタイム手話

開催期間・場所：10 月～１月　第２・４水曜日　オンライン
参　加　者　数：約９名／回

　開講期間中に昼食をとりながら楽しく手話を学べる場を設けています。2021 年度も残念ながらオンライン開催となりましたが、画面をとおして手話で会話を楽しみました。

【ランチタイム手話講師（学生）の声】

中島 大介（生命医科学部医工学科　４年次生）

　私は学部の４年次生であり、少しでも後輩と一緒にランチタイム手話を運営できたらと思ったので、講師を引き受けました。
　春学期に開催できる回数が５、６回ということで、テーマを「5W1H」にして、日常生活でも使えることを考えて質問をベースにした例文を作成しました。質問に対する回答としては、他のイベントに参加したときにも答えられるように最初にまとめて単語を伝えました。たとえば、「どのような手段で大学に行きますか？」という問いに対する回答は、自転車、徒歩、電車、バスなどとなります。
　このような単語は、自分でも日常的に手話で表現する機会がないため、このたびの講師の活動を通して多くの手話を用いた会話ができて、自分自身のためにもなりました。

【ランチタイム手話講師（学生）の声】

大田 竜聖（政策学部政策学科　２年次生）

　私が手話の講師を引き受けた理由は、私が幼少のころからコミュニケーション手段として手話を日常生活で使用しており、その経験や知識を何らかの形で活かしたいという願いがあったためです。手話を知らない人に伝授し、実際に会話する中で「手話」というコミュニケーションツールとその楽しさを伝えていきたいという理由もありました。
　毎回のテーマを考える中で工夫したことは、日常生活で使う頻度が高い疑問文をなるべく簡潔な手話で表現できるような短い文を作ったことです。誰でも真似ができ、実際の動きや物の形をそのまま表している覚えやすい手話を盛り込んだことも工夫した点でした。これは手話の魅力でもあり、誰でも手話のユーザーになれる要素がたくさんあります。
　講師を通じて自分自身が得たことは、手話の動きが持つ意味を改めて理解でき、手話の魅力を再確認できたことです。ただ単にその手話の動きを覚えてもらうのではなく、「この手話はどうしてその動きで表すのか」ということを教えることで、手話表現がもつ多様な成り立ちをあわせて確認することができました。

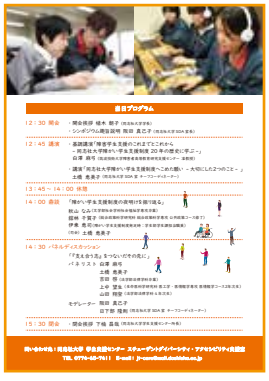
●同志社大学障がい学生支援制度発足20周年記念展示

企画展「『支え合う志』をつないで－障がい学生支援制度発足 20 周年－」
　3 月 19 日（金）～ 5 月 23 日（日）の期間、ハリス理化学館同志社ギャラリー 2 階企画展示室において第 22 回企画展を開催し、7 月 1 日（木）から京田辺キャンパスでも資料を展示しました。
会期：7 月 1 日（木）～ 10 月 31 日（日）
場所：京田辺校地ラーネッド記念図書館 2 階展示室

同志社社史資料センター
YouTube チャンネル

●同志社大学障がい学生支援制度発足20周年記念シンポジウム

開催日・場所：8 月 7 日（土）　オンライン
参　加　者　数：120 名
協力スタッフ：5 名（パソコン通訳）3 名（手話通訳）
テ　　ー　　マ：「DO,CARE」の今とこれから－同志社大学障がい学生支援制度発足 20 周年を記念して－」



本学では、2000年に障害者問題委員会からの学長宛答申を契機として「障がい学生支援制度」がスタートしました。その内容は、障がい学生の把握と相談窓口の設置、大学の責任を明確化した授業保障の基準作成、障がい学生への人的支援制度の確立、奨学金制度創設の検討などです。それ以降、本学では「人一人は大切なり」という創立者新島襄の言葉を胸に、その後も、障がい学生に寄り添った対応をしてきました。

20周年を記念したシンポジウムは、2020年の開催を予定していましたが、コロナ禍により、2021年の開催となりました。

【登壇者の声】

上中 望生（生命医科学研究科医情報学科　2年次生）

「同志社大学の障がい学生支援には長い歴史がある」ということは以前から懇談会で何度か耳にしていました。しかし、具体的にどのような道を辿って現在の形に繋がっているのかについては、支援スタッフとして5年間活動してきたにも関わらず、私はほとんど知りませんでした。

そんな状態で参加した20周年記念シンポジウムで、私は障がい学生支援制度発足のきっかけとなった訴えを初めて知って衝撃を受けました。思いのほかシンプルな1文でした。この訴えを聞き入れ、制度の基盤を作り上げ、改善しながら活動を引き継いできた人たちがいたからこそ現在の支援制度があるのだということを、卒業生の皆さんや設立に携わられた方々の声を聴いて実感できました。また、学内で活動しているときはあまり実感がわきませんが、情報保障をあって当たり前のものにしたいという思いで活動している仲間は学内にも学外にもたくさんいるのだなと嬉しくなりました。

そしてこのシンポジウムに参加したことは、現在の私に何ができるかを考えるきっかけにもなりました。登壇時に話した内容になりますが、私は学内で制度の存在があまり知られていないとよく思うのです。確かにコーディネーターさんや私たちスタッフは支援活動を行っていますが、スタッフ以外の多くの学生との壁はまだ厚いように感じます。たとえば大講義室に通訳用のPCを持って入ると遠巻きに視線を感じます。知り合いがいると「何をやってるの」「偉いね」などと声を掛けられることがあります。私たちが何か特別なことをしているかのように見られているとしたら、まだ情報保障はあって当たり前の存在になり切れていないのだと思います。

今の私にできることは何か。この問いに明確な答えはないと思いますが、「情報保障はあって当たり前」を目指すためには、今後も活動を続けて周囲の人たちに利用学生やスタッフがいることをまずは理解してもらい、支援の輪を広げていくことが必要だと考えています。

【スタッフの声】

新谷 凌平（社会学部産業関係学科　4年次生　パソコン通訳スタッフ）

私は大学1年次からサポート活動を続けていて、もはやPC通訳は慣れっこだと言えると思います。このたびのシンポジウムも自ら志願して通訳を引き受けましたが、普通の授業の通訳とは話が異なります。普通の授業とシンポジウムとを比べてみると、たくさん違いが見えてきます。

シンポジウムでは、複数の登壇者がいて、この日のためにお越しくださった数々の先生方。かと思えば通訳者もたくさんいて、コロナ感染防止のため、隣との間隔は広すぎるくらい空いている。文字通訳を見る人も、隣にいる学生一人だけではなくて、年代も職業もバラバラのたくさんの方々。……そもそも、いくら分担が決まっているとはいえ、通訳者が同時に5人もいるなんて経験したことがありません。自分は誰の発言部分の担当で、誰とペアを組んでいるかを常に意識しておかなければ、たちまち置いていかれます。事前練習をして悟ったことは、手元のPCの小さい画面で次々流れゆく情報を瞬時に判断し、的確に動けなければ大変なことになるということでした。

しかし蓋を開ければどうってことありませんでした。5名のスタッフで分担に従いながらも臨機応変に対応し、難なく進んでいきました。いつしか普段の授業との違いは何も感じなくなり、いつも通りに音声を文字入力していました。通訳をしていて何より救われたのは、訂正担当のスタッフが抜け目なく直してくれたことです。おかげで誤字があっても、文字入力のペースを乱すことなくどんどん進めていくことができました。

予定通りいかないこともありましたが、これまでにない貴重な経験をすることができました。関わったすべての皆さまに心より感謝申し上げます。今後も引き続き精進してまいりますので、何卒よろしくお願いいたします。

浅野 杏奈（生命医科学部医工学科　4年次生　パソコン通訳スタッフ）

このたびは20周年記念シンポジウムという特別な場でPC通訳者として活躍させていただき、ありがとうございました。

PC通訳者としてのお話をいただいたとき、ぜひお役に立ちたいと思うと同時に、これまでのサポート前とは比べ物にならないくらいの不安に襲われました。なぜならば、私は今年度の春からPC通訳者として対面授業のサポートに入るようにはなったものの、普段は主に手書き系のサポート学生として支援に携わっていることや、オンライン授業が主流となってから、勉強会にもなかなか参加することができていなかったので、PC通訳に自信を持てずにいたからです。けれども、PC通訳者としてシンポジウムに参加してみたいという強い思いはありましたので、意を決してPC通訳に挑戦することにしました。

シンポジウム前日まで、過去の勉強会の資料を読み直したり、タイピング練習をしたりと、初心に戻ってPC通訳の活動に向き合い直しました。少しでもPC通訳の技術が上がるようにしたかったのです。

このように準備を重ねて、シンポジウム当日を迎えました。当日は朝からずっと緊張していました。いざ会場についてみると、さらに緊張が増してきました。会場の雰囲気に、本当に特別な機会に携わっていることを肌で感じたからです。実際にシンポジウムが始まってから終わるまではあっという間でした。他のPC通訳者4名の支えもあり、何とかシンポジウムのPC通訳者としての役目を終えることができました。終始不安と闘いながらのサポートでした。

シンポジウム終了後、無事に終えられたという安心感と本当にきちんと通訳ができていたのかという不安が心の中で交差して複雑でした。少し落ち着いてから他の通訳者と合流した時、彼らがいてくれて良かったと心から感謝しました。通訳の間にも支え合いがあったと感じたからです。今回の経験で感じたこと、学んだことをこれからの活動に活かしていきたいと思います。

このたびは、よい機会を与えてくださって本当にありがとうございました。

大和田 宗（法学部法律学科　3年次生　パソコン通訳スタッフ）

このたび、同志社大学障がい学生支援制度発足20周年記念シンポジウムの情報保障として、ＰＣ通訳に参加させて頂きました。

シンポジウムでのＰＣ通訳と普段の授業でのそれとの最大の違いは、話者が複数予定されていることだと思います。シンポジウムでは発信者の変化に機敏に対応し、かつ情報を漏らさぬよう連携することはとても難しかったです。

ただ、通訳者の多い体制だったので、聞き漏らしを補充し、誤字脱字を訂正するサポーターの役割も皆で手分けして担い、臨機応変に助け合ったチームプレイがより確実な情報保障と全体の安心感に繋がりました。他のスタッフの皆様にとても感謝しています。

シンポジウムでは、同志社大学の支援の歴史を振り返り、高等教育における情報保障の先頭をリードして来られた先輩方のご努力や大学全体の取り組みに触れることができ、その一員として日々活動していることの意義の大きさを再認識しました。長い歴史に加われたことをとても誇りに思っています。

大学での支援の必要性が徐々に関係諸立法と共に全国へと浸透していく中で、これからの同志社に何ができるのかについて、私は情報技術の発展と共に考えていく必要があると感じています。COVID-19に対応する中で、インターネットを用いた遠隔でのＰＣ通訳という手段を獲得した私たちは場所の隔たりを克服しつつあります。

そこで、私は演習の授業やディベートなど、複数の話者を予定する授業でのPC通訳のあり方を自身の課題として考えています。混乱することなく確実に情報を届けるためには自身のスキルの向上はもちろんのこと、通訳者間の連携も欠かせません。他のスタッフと意見を交換する中で、さらには会話を共有する全ての当事者の意識や努力が必要だと気付きました。個々に発信される複雑な情報をPC通訳の形でそれを必要とする人に届けるためには皆の協力が必要なのです。

シンポジウムでは登壇者の方々が様々な情報保障を意識され、会話の交通整理が行われました。落ち着いた順序ある会話のやりとりがあったからこそ、情報保障をスムーズに行うことができたのです。

今後も先人のご努力を次へと繋げていけるよう、発信者としての心がけをも意識しつつ、生き生きとした会話のやりとりもスムーズに伝達できるよう日々活動していきたいと思います。改めて、同志社大学の障がい学生支援制度に関わることができて、本当に光栄に思います。今回は貴重な場に参加させていただき、ありがとうございました。

●春学期フォローアップ勉強会　学生企画

開催日・場所：7 月 5 日（月）オンライン
参　加　者　数：4 名（教職員含む）

街中（まちなか）の移動で困っている視覚障がい者を見かけたことはありませんか？
本企画は､｢すみません｣と言いながら道を歩いている視覚障がい者を見かけたサポートスタッフが､「私たちができることはないのか？」と考え、まずは自分たちが実際に体験することが大切という思いをもとにした企画です。
講師スタッフがアイマスクをしながら白杖と iPhone を持って、室町キャンパスをスタートし今出川キャンパスの目的地を目指します。参加者は､遠隔地で iPhone の映像と講師スタッフの声を頼りに､目の見えない学生（役）をサポートして目的地へ誘導しました。

参加者の声

「視覚二人羽織」

遠隔でサポートをしてくれる人の声を注意深く聞くと、普段頼りにしている些細な音を聞き逃してしまい、事故を起こしてしまう可能性があることや、突然の出来事の対応が困難になることをこの企画を通して学びました。私自身移動の補助をしてみて遠隔でのサポートよりも、実際に横で補助する方が、安心して行えました。しかし、新型コロナウィルスの感染拡大の観点から、視覚障がい者の中には、移動補助を行うことに抵抗がある方も多いと思います。この遠隔サポートシステムがさらに改善され、そのような人が安心して生活ができるようになれば良いと思いました。
私たちが日々、いかに目からの情報に頼って生活しているのかを改めて知ることができ、視覚障がいのある方が目的地へ行くために、実際にどのようにルートを理解しているのか知りたいです。
オンラインサポートする側として、画面の見え方が大事だと思いました。足元が見えないと、地面の状態や向いている方向がわからず、細かいところは隣でサポートしてくださってる方にお任せしたほうが安全だと思いました。
また、障がい物が見える範囲も狭かったので、広角カメラとかだと、全体の様子や位置を把握できそうです。
今回だけでなく、いつも思うことは、物の位置や方向を表すとき、どのような表現がわかりやすいのかな、と迷います。「若干」という表現は使うべきではないのか、使っても伝わるのか、点字ブロックや白状はどのくらい役立っているのか、実際に利用学生さんに聞いてみたいと思いました。

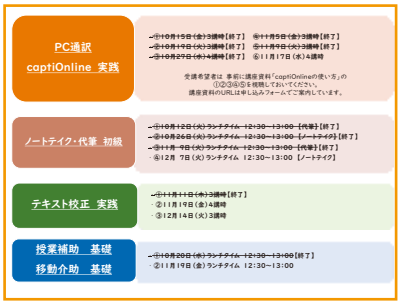
●春学期末全体懇談会

開催日・場所：8 月 26 日（木）オンライン
参　加　者　数：52 名（教職員含む）

全体懇談会は、利用学生とサポートスタッフに春学期の活動を振り返ってもらい、SDA 室としてキャッチアップすべきニーズを把握して、それを秋学期に活かし、支援環境の改善をはかることを目的に開催されるものです。
今回のグループワークのテーマは、「サポートに関するピクトグラムを作成しよう」です。東京 2020 オリンピックの開会式では､ピクトグラムに関する演目がありました。「聞こえなくても楽しくそれぞれの競技を確認できた」という聴覚障がいのあるコーディネーターの言葉をきっかけに、懇談会のテーマとして取りあげ、普段行っているサポートを振り返りながら、その特徴をうまく表現したピクトグラムを作成しました。

●秋学期フォローアップ勉強会

開催期間・場所：10月12日(火)～12月14日(火)
　　オンライン
参　加　者　数：延べ31名
協力スタッフ：延べ13名（講師）
　　延べ5名（パソコン通訳）



障がいについて語ろう

　秋学期のフォローアップ勉強会では、「障がいについて話し合おう～社会的障壁って何だろう～」というテーマで、視覚に障がいのあるシム　メルビン　チャーフィーさん（グローバル・コミュニケーション学部４年次生）をお招きし、障がいや社会的障壁について語っていただきました。

SDA室　：弱視とのことですが、どのような障がいなのか教えてもらえますか？

メルビン：そうですね、中途障がいというのかな。17歳くらいに発病して日本に来ました。見え方としては、両目とも真ん中から左の方はだいたい90%くらい欠けている状態で、右眼は85%くらいかけている状態です。欠けているというのは、まったく見えないというわけでなくて、表現がしづらいのですが、点がたくさん入っている状態で影みたいな感じですね。人は影しか見えないです。

SDA室　：視野が欠けているって、想像が難しいんですけど、例えば、今、私たちは手を伸ばすと届くくらいの距離に座っていますが、私はどんな風に見えていますか？

メルビン：頭があって体があって。影を見ている感じですね。手のところに棒みたいな影が見えるから、おそらくペンを握ってるんだなと。この距離でしたら、残りの視野で、視線は私の方を見ているのがわかるんですが、もうちょっと遠くなると表情は完全にはわからないです。

SDA室　：そうなんですね。日常生活の中で、これ困るなぁとか、時間がかかるなぁっていうことがあれば、教えてもらえますか？

メルビン：そうですね、例えば、バスに乗ったりするときに、２台のバスが一緒に来ることもあって、どこかに「何系統」って書いてあるはずなんですが、見えないので、乗るかどうかすごく迷うときがあります。一人のときは、間違って乗ることがあって、ちょっとした旅行（笑）をしたこともあります。

SDA室　：例えば、バス停の時刻表を見るためには、かなり近づくことになりますが、そういう行為について人の視線は気になりますか？精神的な面からくる「人の視線」の障壁みたいなの。

メルビン：結論から言うと、普通にあります。目がこの状態になってからそれなりにたっていますが、スマホの操作も、掲示とか看板もかなり近づいて見てます。健常者は、普通の距離でスマホの操作をしてるんですが、視覚障がい者が持っている白い杖は普段使っていないので、「この人は、どうしてすごく近い距離でスマホをみてるの？」と思われてるんじゃないかと感じてしまう部分があります。なので、駅で駅員さんに道を聞くときは、障害者手帳を見せながら、助けが必要というふうに話しかけます。

SDA室　：生活していくためには、ごはんも食べないといけませんが、コンビニなどで食べたいものがいっぱい並んでるのをどのように選んでるんですか？

メルビン：いろんなパターンがあるんですが、コンビニとかスーパーでおにぎりを選ぶ場合は、普通であれば何のおにぎりか見てわかるんですけども、私は、手に取った後、ほぼ目の前の距離まで近づけないと何のおにぎりかわかりません。コロナのこともあって、それができないので、おにぎりを買うときは、だいたいロシアンルーレット的な感じになりますね。自分は梅が苦手なので、梅を買ってしまったらハズレみたいな。だから、離れた列のおにぎりを２個買います。さすがに両方梅ってのはないでしょう、という感じで。

SDA室　：いつも同じところに同じ商品が並んでいるというわけではないですもんね。大学での授業の様子もお聞きしたいのですが、どのようなサポートを受けているか教えてもらえますか？

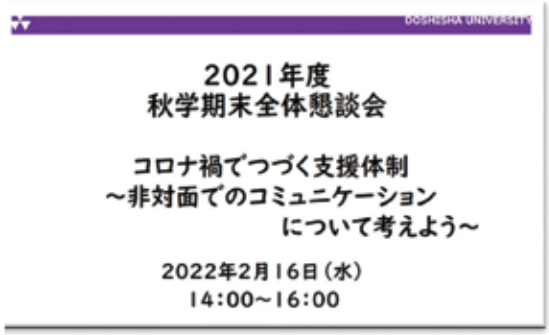
メルビン：大学のサポートに関してはスタッフをつけてもらっています。対面の授業では、基本的に拡大読書器を使っています。そして、隣にスタッフが座って授業内容をノートに書き留めてもらったり、手元資料のどこをやっているか指さしをして教えてもらっています。というのは、手元資料は、拡大読書器で一文字ずつ確認していくので、どうしても授業スピードに追いつかないのです。みなさんが10分で読める文章は、私は３～４倍かかり、30～40分必要になります。また、レポート用の資料探しも時間がかかるので、空き時間に図書館で資料を一緒に探してもらったり、資料を読みあげてもらったりしています。

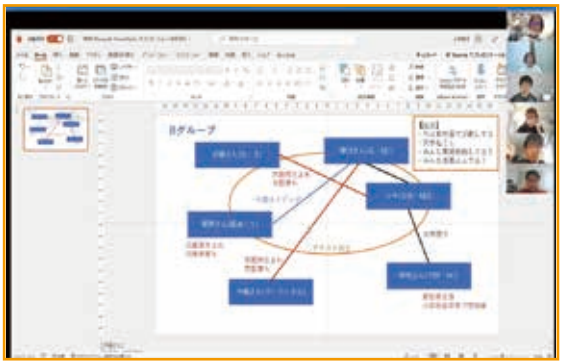
SDA室　：今は、アクセシビリティ機能のある、読み上げソフトなどありますが、使っていますか？

メルビン：はい。読み上げソフトは、合成音声というのかな。フラットで機械的な読み方ですよね。どうしても早く読みたいときは使いますが、私は合成音声が苦手で抵抗があるんです。なので、私にとっては、効率的というほどではないです。結局のところ、残りの視力で確認したり、聞きやすい人の音声に戻っている気がしています。今も、自分にとって良いアクセス方法を探っています。

●秋学期末全体懇談会・懇親会

開催日・場所：2022 年 2 月 16 日（水）　オンライン
参　加　者　数：60 名（教職員含む）





秋学期末全体懇談会

　秋学期末の全体懇談会では、利用学生とサポートスタッフが 1 年を振り返り、お互いの関係性を図に表すグループワークを行いました。
　オンライン上で話し合いながら、サポート活動の内容、出身地、今ハマっていること等から見つけ出した共通点をもとに、それぞれの班が図に描きあげてくれました。
　ひとつの質問に対して誰かが答えたあとに更に質問を重ねる形で会話を深めながら進めているグループ、全てチャットでコミュニケーションをとっているグループ、音声認識ソフト・相づち・リアクションを使いわけながら進めるグループと、コミュニケーションの方法もさまざまで、コミュニケーションの多様性を実感する時間ともなりました。

　続く懇親会は、これまでサポートをしてくれた先輩スタッフと多くの学びの機会をくれた障がいのある利用学生へ感謝の気持ちを伝える場です。共に過ごした時間を振り返り、卒業生、修了生へ、お礼のメッセージを届けました。

●チャペル・アワー

開催日・場所：10 月 22 日（金）
　　10 月 29 日（金）
　　11 月 2 日（火）
　　11 月 30 日（火）
　　同志社礼拝堂
　　（今出川校地）
協力スタッフ：4 名（ノートテイク）

●校祖墓参

開催日・場所：11 月 20 日（土）
　　同志社墓地
協力スタッフ：2 名（ノートテイク）

●障がい学生対象「就職ガイダンス＆相談会」

開催日・場所：11 月 30 日（火）
　　オンライン
内　　容：パソコン通訳
協力スタッフ：2 名

●第17回Challengedキャンプ

第１回
開催日・場所：12 月 23 日（木）　京田辺校地　知真館１号館 210 教室
　　12 月 24 日（金）　今出川校地　寒梅館地下 A 会議室
参　加　者　数：25 名（教職員含む）

第２回
開催日・場所：2022 年 2 月 24 日（木）　両校地　オンライン
参　加　者　数：24 名（教職員含む）

第 17 回 Challenged キャンプが開催されました。
今年も残念ながら新型コロナの状況悪化を受け、夏休み期間中の２泊３日の日程でのキャンプは実施できませんでしたが、第１回（12 月 23 日京田辺校地、12 月 24 日今出川校地）に一人一人が障がいの体験をし、その体験をもとにした障がいに対する考察の期間を設け、その結果を第２回（2 月 24 日オンライン）に交換するという新たな形での開催となりました。

【参加学生の声をご紹介します】

第１回に実際に体験することで、障がいのある方の生活についていろんな気づきがありました。１回目が終わった後の時点でも、自分のなかで、障がいに対しての前向きな気持ちが以前より増えたと思って満足していましたが、２回目のグループワークで、障がいに起因するバリアについて話し合うことで、じゃあどうしたらよいのか、という「これから」まで考えることで、これまで以上に考えを深めることができたと思います。（法学部法律学科　２年次生　サポートスタッフ）

これまで障がいに対して自分の中で何となくイメージを抱いているだけで、自分にはあまり関係ないことだなとどこか遠いもののように感じていましたが、キャンプを通じて自分の言葉でアウトプットで皆さんとディスカッションをすることで、しっかりとした考えを持てるようになりました。
キャンプに参加することで普段の生活では体験できないようなことを体験し、障がいのある方がどのような感覚で生きているのか、その一片を伺い知ることができたと感じました。また、他のスタッフの方の意見を聞き、自分とは違う経験、考え方に触れ、新たな気づきがたくさんあったことも参加してよかったことの一つです。（法学部法律学科　３年次生　一般参加）

肢体障がい学生が車椅子を使っておられるのはわかっていたが、実際に利用しておられる中で困ったことや難しい所にまでなかなか想像ができなかった。実際に車椅子を利用している利用学生と同じ体験をすることで、どんなことに気をつけないといけないのか、車いすの利用は何が難しいのか等を、自分の身をもって経験することができた。車椅子を利用されているのを見るのと実際に体験するのでは、それに対して抱く考え方が全く違った。（政策学部政策学科　２年次生　利用学生（聴覚障がい））

●複合領域科目
「ダイバーシティ社会における『支え合い』を考える」

開講期間・場所：9 月 27 日（月）～ 2022 年 1 月 24（月）
（月曜 6 講時）
今出川校地良心館 304 教室またはオンライン
協 力 ス タ ッ フ：延べ 15 名（パソコン通訳）

2021 年度の複合領域科目「ダイバーシティ社会における『支え合い』を考える」は、前年と同様に次の 3 点を到達目標（Goals,Aims）として、5 人の教員のリレー形式により秋学期今出川校地で開講されました。

①障がい者（学生）を取り巻く状況・実情を踏まえつつ、ダイバーシティの視点から「支え合い」の意味と課題を理解できるようになる。

②「支え合い」の手段としての「コミュニケーション」に着目し、障がい体験によって支援する人 / される人双方の立場から、「支援」のあり方について多角的に考察できるようになる。

③主体的な学びを起点として、多様な他者・社会に対して包括的に課題解決に向かう姿勢を持つことができるようになる。

今年度の授業も新型コロナ禍の影響を受けてオンライン、対面併用のハイブリッド方式での開講となりましたが、24 名（他大学生 2 名を含む）の受講生が最終日のレポート試験を受験しました。

今年度は、授業の直前に 1 年遅れの「2020 東京パラリンピック」が開催されたことから、パラリンピックの意義を問う授業やパラリンピアンとそのサポーターの絆を問う授業は、例年以上に受講生の関心を呼んだことも特徴的でした。

さらには、本学が障がい学生に提供する「合理的配慮」の具体例として、肢体不自由体験、見えない体験、聞こえない体験や、文字通訳のデモンストレーションの実施を通して、多様性に対する受講生の意識を高める工夫がありました。

これらの工夫は、本授業が目的とする現代社会において実現するべき「支える」「支えられる」関係、すなわち「支え合い」の持つ意味と課題を考察する際の絶好のアプローチとなったことが、授業後の小レポートから伺えました。

授業最終日のレポート試験では、5 人の講師陣のリレー形式での授業の特徴を表すかのように、バラエティに富んだテーマで、レベルの高い論考が寄せられたことも例年通りでした。

来年度は、授業で取り上げる障がいや困り感をより多様なものとすることで、「支え合い」に対してこれまで以上の多様なアクセスを可能とする授業方針が決定されたことを付言します。

社 会 貢 献 事 業

●パラスポーツ振興事業
パラスポーツトークイベント　～誰もがいつでもどこでもスポーツを楽しめる未来をめざして～

開催日・場所：2022 年 2 月 23 日（水）
京都市北文化会館ホール
内　　容：パラスポーツの魅力を発信するイベントの
パソコン通訳
協力スタッフ：4 名

SDA 室のサポートスタッフとして活動している学生 4 名が、京都市と公益財団法人京都市障害者スポーツ協会が主催する「パラスポーツトークイベント～誰もがいつでもどこでもスポーツを楽しめる未来をめざして～」に PC 通訳として参加しました。

【PC 通訳に参加した学生の声】

阿南 啓太（法学部法律学科　3 年次生）

私は、パラスポーツトークイベントに PC 通訳者として参加しました。通訳の依頼をいただいたときは不安が先立ち、応じるかどうか迷いましたが、普段行っている活動を学外で活かすことのできる良い機会だと思い、応じることにしました。

イベント当日は 4 人体制での通訳でしたが、最初はかなり緊張しました。というのも、誰でも読みやすい文章を心がけることはもちろんですが、話者が 6 人もいる中で通訳をする機会は、授業ではほとんどなく、私自身も経験したことがなかったからです。また、通訳者同士の連係が上手く取れるかということも不安でした。

本番では、対談の文脈が伝わるよう臨機応変に対応しないといけないような場面がありましたが、登壇された方々の配慮や、一緒に通訳していただいた先輩方のおかげで、無事に最後までやり遂げることができました。

今回のイベントで経験したことを、これからのサポートに活かしていきたいと思います。良い機会をいただきありがとうございました。

● 2021 年度障がい学生支援制度スタッフ登録・活動の状況

登録状況　（単位：人）

2021 年度	スタッフ	学生	一般	合計
春学期（8 月現在）	登録者数	105	12	117
	活動者数（4 月～8 月）	54	4	58
秋学期（2 月現在）	登録者数	105	16	121
	活動者数（9 月～2 月）	59	6	65

週当たりの派遣コマ数（2021 年度春）　（単位：コマ）

活動内容	両校地
代筆	2
対面朗読	2
PC 通訳 (2 名体制)	11
PC 通訳＋ノートテイク	4
文字起こし	12
ノートテイク（1 名･2 名体制）	3
ポイントテイク	2
授業補助	8
移動介助	17
合計	61

※文字起こしは、サポートスタッフ数名および外注で対応
※授業形態は対面 / ネット配信と変動
※点訳・テキストデータ化・代理タイピング、また突発的な授業支援は除く
※大学行事、正課外の学内外支援、勉強会等講師派遣は除く

週当たりの派遣コマ数（2021 年度秋）　（単位：コマ）

活動内容	両校地
代筆	9
対面朗読	1
PC 通訳 (2 名・3 名体制)	18
文字起こし	18
ノートテイク（1 名体制）	2
ポイントテイク	1
授業補助	8
移動介助	16
合計	73

※文字起こしは、サポートスタッフ数名および外注で対応
※授業形態は対面 / ネット配信と変動
※点訳・テキストデータ化・代理タイピング、また突発的な授業支援は除く
※大学行事、正課外の学内外支援、勉強会等講師派遣は除く

1. 本学における障がい学生支援のあゆみ

同志社大学の障がい者支援は 1949 年に遡る。入学試験において、日本の大学で初めて点字受験の対応を開始した。1975 年、点訳･墨訳担当者を配置し、試験問題の点訳を開始。1982 年には学長の諮問機関として「障害者問題委員会」を設置し、これを契機に今出川校地内建物入口スロープや自動昇降機を設置、1984 年からは語学テキストの点訳業務を開始した。

1986 年、京田辺校地の開校にあたり、キャンパスの基本設計から全面的なバリアフリー化をはかり、図書館内には点字室や対面朗読室を設けた。

2000 年 3 月、「障害者問題委員会」からの学長宛て答申を契機として同年 5 月「障がい学生支援制度」がスタートし、翌 2001 年に同委員会からの再答申により、講義補助から講義保障へと一段と踏み込んだサポートが開始された。この際、一部の支援で、サポートスタッフの活動を有償化した。

2002 年には「障害者問題委員会」を「ノーマライゼーション委員会」と名称変更し、学内の障がい学生の総合的相談窓口を、学生部（現在の学生支援センター障がい学生支援室）に一本化、2004 年、今出川・京田辺の両キャンパスに常勤の障がい学生支援コーディネーターを配置し、日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）との連携協力を開始した。

2006 年には日本学生支援機構（JASSO）の「障がい学生就学支援ネットワーク事業」の拠点校として連携協力を開始し、2007 年にはアシスタントスタッフ（有償）とボランティアスタッフ（無償）を統一し、「サポートスタッフ」として全支援を有償化した。

2008 年､「ノーマライゼーション委員会」を発展解消し､「学生主任連絡会議」に整備･再編するとともに､学生支援センター内に「障がい学生支援室」を設置した。

2009 年秋より、事務組織上、障がい学生支援室を京田辺校地学生支援課に一元化した。

2014 年秋に発足した全国高等教育障害学生支援協議会（AHEAD　JAPAN）に発起人校として参加した。

2016 年 4 月の「障害を理由とする差別解消の推進に関する法律（障害者差別解消法）」施行に伴い、2018 年 4 月に障がい学生支援制度の一部見直しを行い、修学支援に関する申請から合理的配慮の決定手続きまでの過程を明確化するとともに、支援内容については学生とその所属学部（大学）が合意をとる形式とした。

2. スチューデントダイバーシティ・アクセシビリティ支援室

専属の障がい学生支援コーディネーターが常駐しており、障がいのある学生に対して学生サポートスタッフの協力を得て、授業保障に関わるサポートを行っている（授業保障とは、障がいのある学生が希望するすべての授業について、一般学生と同じレベルで受講できるよう保障することである）。

スタッフ

マネジメント（教員 1 名、職員 3 名）
コーディネーター（6 名　内 1 名は手話通訳者）
事務補佐員（7 名）

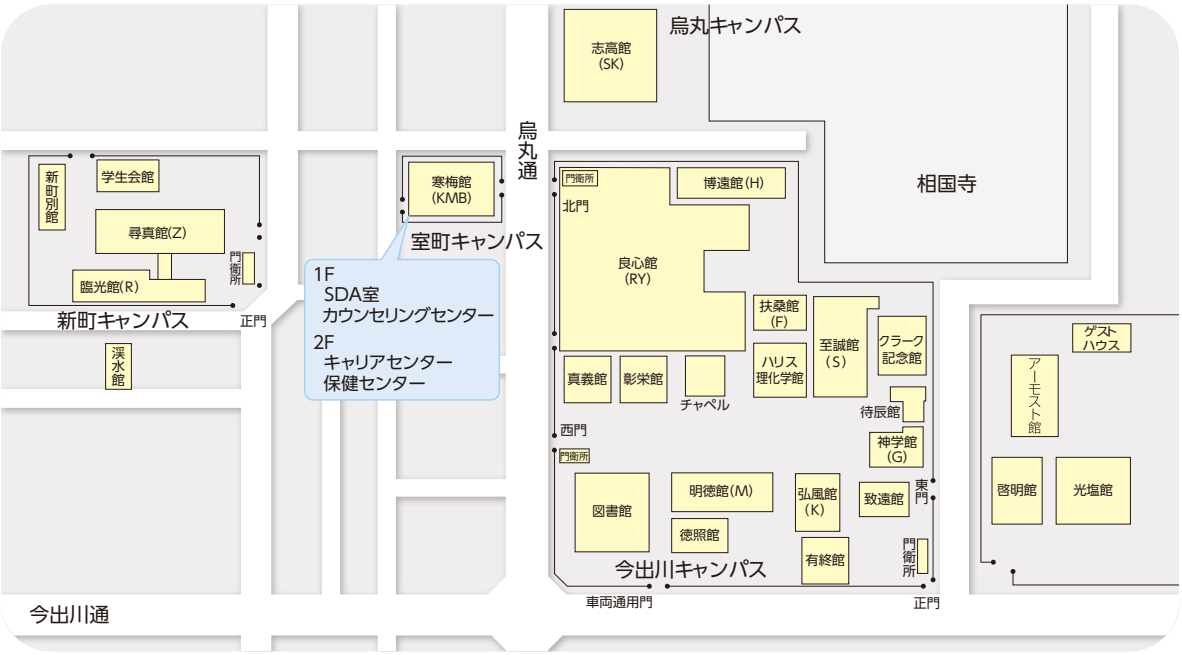
同志社大学における障がい学生支援の沿革

1937 年	ヘレン・ケラー女史、同志社女子部で講演
1949 年	大学入学試験において点字受験対応を開始（日本の大学では初）
1952 年	同志社大学盲学生友の会（盲友会）結成、盲友会による授業支援開始
1975 年	教務課に非常勤の点訳・墨訳担当者を配置 試験問題の点訳を開始、1984 年度より語学テキストの点訳業務開始
1982 年	大学長の諮問機関として「障害者問題委員会」設置（1982 年 4 月）を契機に、以後順次今出川校地内の建物入口スロープや自動昇降機等を設置
1986 年 4 月	京田辺校地設計にあたりバリアフリー化を企図、図書館内に点字室と対面朗読室を開設
1991 年	視覚障がい者用ワープロ購入と同時に図書館（今出川校地）内に点字室を設置
1992 年 4 月	教務課（今出川校地）に常勤の点訳・墨訳担当者を配置
2000 年 5 月	障害者問題委員会からの学長宛答申（2000 年 3 月）を契機として「障がい学生支援制度」がスタート（予算管理は教務課） ・障がい学生の把握と相談窓口 ・正課授業保障の体系化（教科書点訳は基本的に大学が責任をもつ） ・障がい学生の人的支援制度 （1）「障がい学生支援連絡会」を設置 （2）学生課（京田辺校地）によるボランティア（ノートテイク・パソコン通訳）学生派遣 （3）奨励金制度の導入・懇談会の開催
2001 年 10 月	障害者問題委員会からの学長宛答申（2001 年 8 月）を契機として「講義補助」から「講義保障」へ制度の謳いなおし ・講義保障のために、ボランティアスタッフ（主に視覚障がい学生及び肢体不自由学生へ学生生活支援（無償））に加え、アシスタントスタッフ（聴覚障がい学生への講義通訳（有償））制度を導入
2002 年	予算管理を学生課（京田辺校地）へ移管 「障害者問題委員会」を「ノーマライゼーション委員会」と名称変更
2002 年 1 月	学生課（京田辺校地）に常勤の手話通訳担当者を配置
2003 年	「障害」の「害」について、人を意味するときのみ「障がい」とする旨を決定、採用 大学院生に対しては可能な範囲で補助をする「講義補助」という立場を明確化
2003 年 4 月	入学式・卒業式に手話通訳を導入
2004 年 4 月	両校地に常勤の障がい学生支援コーディネーターを配置 肢体不自由者（電動車イス専用）用トイレ設置
2004 年 5 月	学生部再編により学生支援センターへ名称変更
2004 年 10 月	日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）への連携協力開始
2005 年 3 月	両校地の全ての教室棟扉・トイレに点字シールと対応墨字シール貼付
2005 年 5 月	JR 福知山線脱線事故で受傷した学生に対して「障がい学生特別支援体制」で対応
2005 年 8 月	Challenged キャンプ開始
2005 年 9 月	学際科目（現・複合領域科目）「学びのバリアフリーを考える－障がい学生支援－（聴覚障害への講義保障を通して）」の運営協力を開始
2006 年 10 月	日本学生支援機構（JASSO）の「障害学生修学支援ネットワーク事業」に拠点校として連携協力開始
2007 年 4 月	ボランティアスタッフ（無償）とアシスタントスタッフ（有償）を統一し、「サポートスタッフ」として全支援有償化
2007 年 10 月	障がい学生キャリア支援セミナーをキャリアセンターと協力して開催
2008 年 4 月	「ノーマライゼーション委員会」を発展解消し、「学生主任連絡会議」に整備・再編 障がい学生支援窓口を「障がい学生支援室」として再編
2008 年 10 月	第 4 回 PEPNet-Japan シンポジウム「聴覚障害学生支援に関する実践事例コンテスト 2008」において

	Challenged キャンプの発表で PEPNet-Japan 賞を受賞
2009 年 4 月	学生支援機構を設置し、4 つのセンター（学生支援・保健・カウンセリング・キャリア）が連携し、組織的かつ総合的な学生支援体制を構築
2009 年 11 月	「障がい学生支援室」を学生支援センター京田辺校地学生支援課に一元化
2010 年 11 月	第 6 回 PEPNet-Japan シンポジウム「聴覚障害学生支援に関する実践事例コンテスト 2010」において「心のバリアフリーをめざして」および「Challenged キャンプ」の発表で準 PEPNet-Japan 賞を受賞
2011 年 1 月	PEPNet-Japan のアメリカ視察にコーディネーターが参加
2011 年 4 月	日本学生支援機構（JASSO）「平成 22（2010）年度障害学生の教育支援に関する調査研究委託事業」『理工系大学院における聴覚障害学生の支援について』調査報告書発行
2011 年 5 月	PEPNet-Japan 連携協力校として東日本大震災により被災した大学への遠隔情報保障支援を開始
2011 年 9 月	障害学生修学支援ブロック別地域連携シンポジウムを日本学生支援機構と共催
2011 年 10 月	PEPNet-Japan「障害学生支援大学長連絡会議」に開催校として協力
2012 年 12 月	第 8 回 PEPNet-Japan シンポジウム「聴覚障害学生支援に関する実践事例コンテスト 2012」において「同志社の実り～そだてる・つながる・ひろがる～」の発表で 2 度目の PEPNet-Japan 賞を受賞
2013 年 2 月	同志社大学障がい学生支援に関する指針（ガイドライン）制定
2013 年 4 月	学生支援センター障がい学生支援室を大学事務機構規程に明記
2013 年 6 月	障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律（障害者差別解消法）制定
2013 年 12 月	PEPNet-Japan が「平成 25 年度バリアフリー・ユニバーサルデザイン推進功労者表彰」において「内閣総理大臣表彰」を受賞
2014 年 4 月	今出川・京田辺両校地フリーアクセスマップ製作
2014 年 10 月	一般社団法人全国高等教育障害学生支援協議会（AHEAD JAPAN）発足［発起校として参加］
2014 年 12 月	2015 年度から「人」を意味するときに加え「人の状態」を表す場合も「障がい」と表記を統一することを決定
2015 年 2 月	同志社大学障がい学生支援に関する指針（ガイドライン）改正
2015 年 6 月	PEPNet-Japan　遠隔情報保障事業モデル校採択
2015 年 11 月	大学生活協同組合におけるインターンシッププログラムを実施
2015 年 12 月	同志社大学障がい学生支援室内規制定
2016 年 4 月	障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律（障害者差別解消法）施行
2016 年 6 月	PEPNet-Japan 特別プロジェクトとして熊本地震により被災した大学への遠隔情報保障支援を開始
2017 年 1 月	同志社大学障がい学生支援調整委員会に関する申合せ制定
2017 年 11 月	同志社大学障がい学生支援に関する指針（ガイドライン）改正
2018 年 4 月	障がい学生支援制度を一部変更し、合意内容確認書等を導入
2020 年 5 月	障がい学生支援制度発足 20 周年
2020 年 11 月	第 16 回 PEPNet-Japan シンポジウム「聴覚障害学生支援実践事例コンテスト 2020 特別編」でサポートスタッフが「最優秀作品賞」を受賞
2021 年 2 月	スチューデントダイバーシティ・アクセシビリティ支援室内規制定
2021 年 3 月	ハリス理化学館同志社ギャラリー第 22 回同志社ギャラリー企画展「『支え合う志』をつないで－障がい学生支援制度発足 20 周年－」（2021 年 3 月 19 日～ 5 月 23 日）
2021 年 4 月	改組により「スチューデントダイバーシティ・アクセシビリティ支援室」設置
2021 年 6 月	障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律の一部改正・公布
2021 年 8 月	障がい学生支援制度発足 20 周年記念シンポジウムを開催

京田辺校地

今出川校地



同志社大学 学生支援センター
スチューデントダイバーシティ・アクセシビリティ支援室

京田辺校地 成心館1階
〒610-0394 京田辺市多々羅都谷1−3
Tel: 0774-65-7411
E-mail: jt-care@mail.doshisha.ac.jp

今出川校地 寒梅館1階
〒602-0023 京都市上京区烏丸通上立売下ル御所八幡町103
Tel: 075-251-3273
E-mail: jt-care@mail.doshisha.ac.jp

本パンフレットはユニバーサルデザイン(UD)フォントを使用しております。
ユニバーサルデザイン(UD)フォントとは、より多くの人へ適切に伝えられるよう、ユニバーサルデザインの視点から見やすさ、読みやすさを配慮・確認し、制作されたフォントです。

UD FONT by MORISAWA

2022 年 7 月発行